

# 「速度」の見極め

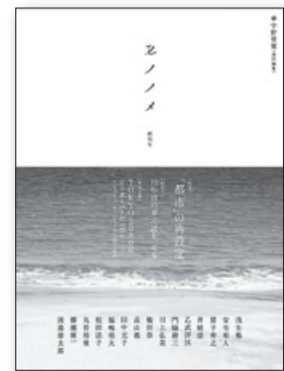
一橋大学大学院法学研究科 准教授 阿部 辰雄

「速すぎる。」

私は、震が関で働いているとき、何度もこう思いました。例えば、どこかで自分の所管する業務に関する事件が発生すると、瞬く間にそれがSNSで拡散され、マスコミがそれを取り上げ、ワイドショーで全国に流されます。私たちはそのとき、本当の事実関係も確認できていないままに、コメントや対処を求められます。場合によっては、その事件について十分咀嚼できないまま国会答弁の準備を行います。そして、時には当初把握していた事実と大きく異なる背景が浮かび上がってくることも稀ではありません。私は、こうした事態に直面するたびに、「本当にこうした問題は、一分一秒を争って検討すべき問題なのだろうか。事実を落ち着いて確認してから対処しても十分間に合うのではないか。」というやりきれない気持ちを抱いていました。もちろん災害対応のように、人命を救助するために最善・最速を尽くしているときにこのようなことを思ったことはありません。ですが、全ての事象に、災害対応のようなスピード感で当たることは現実的に困難ですし、速さ以上に大事なものがある場合がほとんどです。しかし、ありとあらゆるものに「速さ」が求められる傾向は、インターネット・SNSの拡大とともに、より加速しているように思います。

そんな中出会ったのが、今回紹介する『遅いインターネット』（宇野常寛／著、幻冬舎、1,760円）です。本書は、トランプ氏が当選した米大統領選挙、ディズニーと「ポ

ケモンGO」の対比、吉本隆明の再評価などをモチーフとして、現在のインターネットが抱え、また、生み出している問題を明らかにします。そして、その根本原因をその「速度」であるとし、あえて速すぎる情報の消費速度に抗って、少し立ち止まり、ゆっくり情報を咀嚼して消化できるインターネットの使い方、「遅いインターネット」を提案しています。著者の宇野常寛氏は、この「遅いインターネット」を実現するために「遅いインターネット計画」を立ち上げ、昨年9月には、あえて紙媒体で「モノノメ」(PLANETS / 第二次惑星開発委員会)という雑誌を刊行しています。この「モノノメ」の創刊号に寄せられた、震災後10年を経た東北道の紀行文は、まさにこうした思想を体現する読み応えのあるものになっています。



雑誌「モノノメ」 PLANETS / 第二次惑星開発委員会

現実の社会では、突然発生し、速やかに対処しなければならない問題が日々発生しています。その最前線で事態の対処に当たる公務員の皆さんは、いつも最善・最速を目指して奮闘されていることと思います。(もちろん、そのことには敬意を払いつつ、) 他方で、そうした中においても、特に管理職として組織を率いる立場にある方は、少し立ち止まり、直面する問題を咀嚼し、その問題に適した「速度」を見極めてみることも必要なのではないでしょうか。本書は、そのような見方をする際の一つの視座を提供してくれているように思います。



『遅いインターネット』  
宇野常寛／著 幻冬舎